

13) 代城跡 (第2表 No.14)

①立地と概要

代城は、五箇地域の代地区に所在したといわれている。過去の調査では地区の中心部、集落の北の山を推定地として踏査をしているが、遺構を確認するに至っていない。

②今回の調査

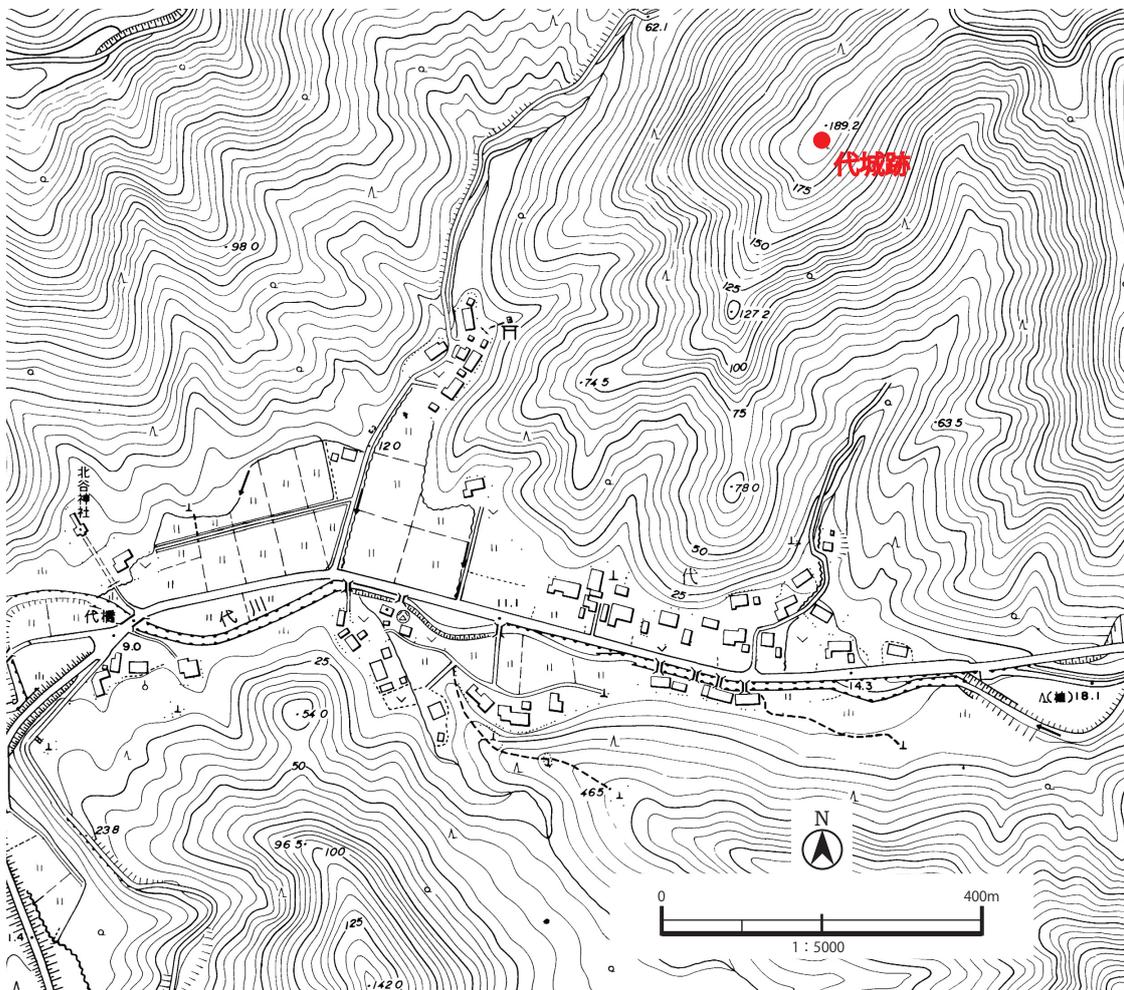
今回は、推定地とされている北谷神社北側の裏山を踏査したが、遺構を確認するには至らなかった。

③今回の調査結果を踏まえた所見

今回も代城の位置を確定するには至っていないが、過去に北谷神社は違う場所にあったとの話があることから、旧境内地の裏山を調査する必要がある。

第17表 郡城跡の遺構一覧

過去の調査で確認された主な遺構	今回の調査で確認された主な遺構
未確認	未確認



第17図 代城跡推定位置図

14) ^{イナリヤマ}稲荷山城跡 (第2表 No.15)

①立地と概要

稲荷山城跡は五箇地域の南方地区の稲荷山(標高76m)にあり、小字は殿ケ内(とのがち)である。山頂に主郭がありどの方角も眺望が良い。傾斜の緩やかな南側の尾根には堀切があり、舌状に3段の曲輪が造られている。そのほかの3方は急峻であるが、北斜面には豎堀を設けている。

重栖湾から重栖川を通り、中心地である郡地区までの中継地点として重要な位置に設置されている。

②今回の調査

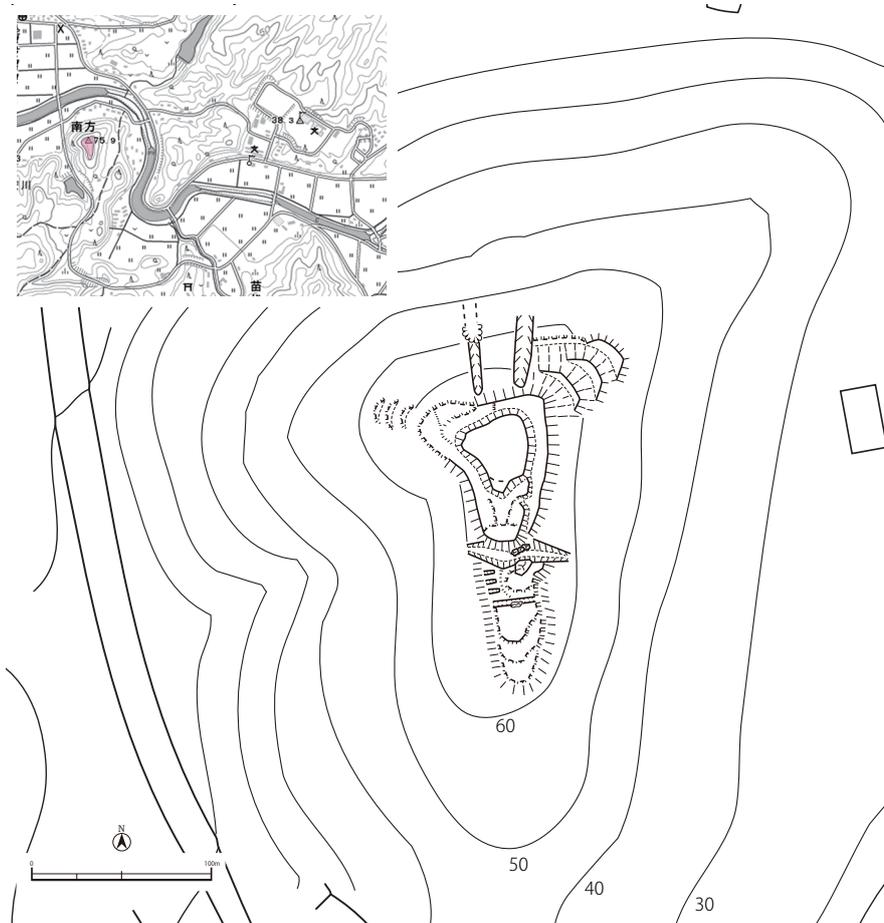
過去の調査を参考に踏査したところ、南側の尾根2か所に堀切を確認し、北斜面には2条の豎堀を確認した。

③今回の調査結果を踏まえた所見

規模は小さいが、まとまった範囲にしっかりとした防御が意識されている。重栖川を挟んで対岸の美々津城とともに前線の要所を監視する出城として重要視されたと考えられる。

第18表 稲荷山城跡の遺構一覧

過去の調査で確認された主な遺構	今回の調査で確認された主な遺構
曲輪(3ヶ所)、堀切、豎堀	堀切(南斜面)、豎堀(北斜面)



第18図 稲荷山城縄張図

15) 美々津城跡 (第2表 No.16)

①立地と概要

美々津城跡は県道の拡幅工事により平成の初期に消滅している。五箇地域の南方地区字美々津にあり、地元では城山(じょうやま)と呼ばれている。隠岐に関する近世の地誌には記載がないが、地元では城跡であったと認識されている。麓の重栖川を挟んで西には稲荷山城がある。この2城で重栖川流域を監視・支配していたと考えられる。開発にかかる発掘調査で石組み遺構などが確認されているが、山城に関わるものと断定はできないため、遺構等は不明である。

②今回の調査

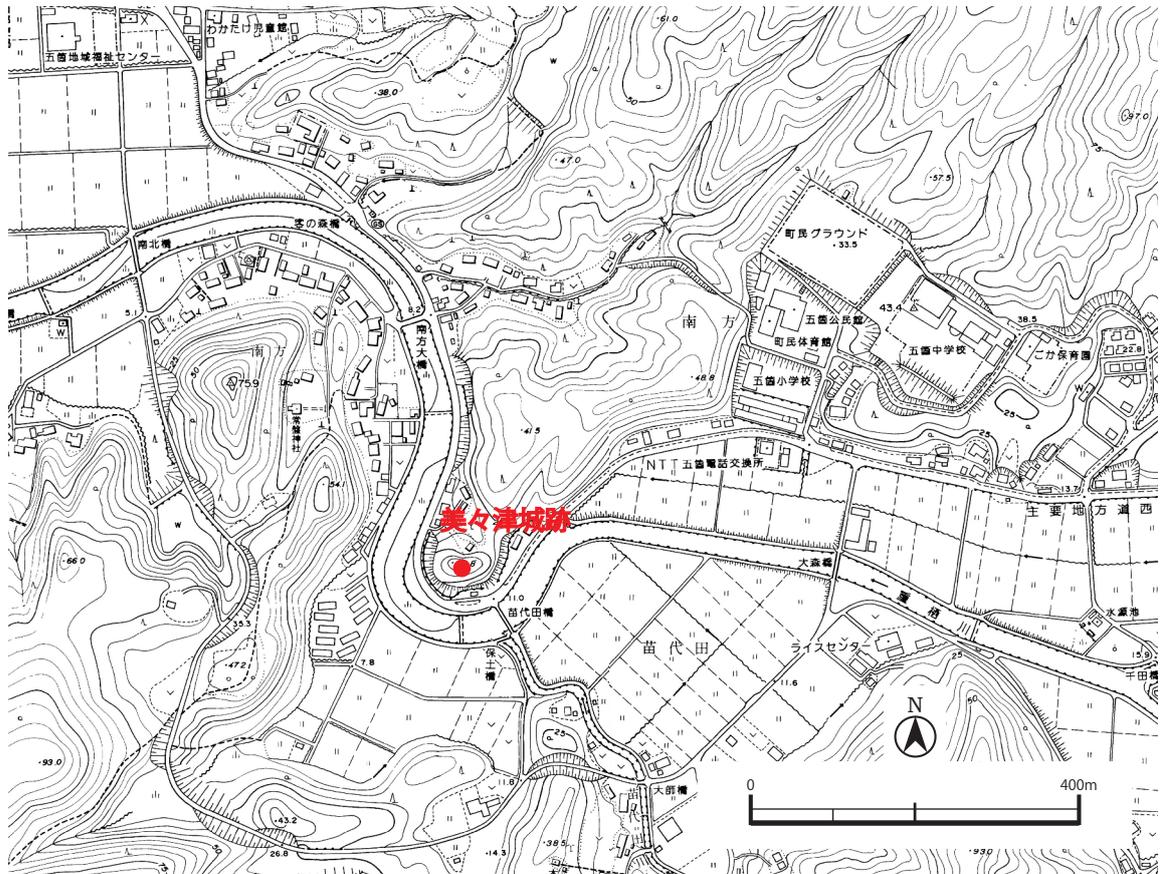
すでに消滅しており、今回は調査を行っていない。

③今回の調査結果を踏まえた所見

遺構が確認されていないため検討材料がないが、地理的には重要な位置であり城山と呼ばれている点から山城であると考えられる。周辺の踏査で新たな知見が得られる可能性はある。

第19表 美々津城跡の遺構一覧

過去の調査で確認された主な遺構	今回の調査で確認された主な遺構
なし	消滅



第19図 美々津城跡位置図

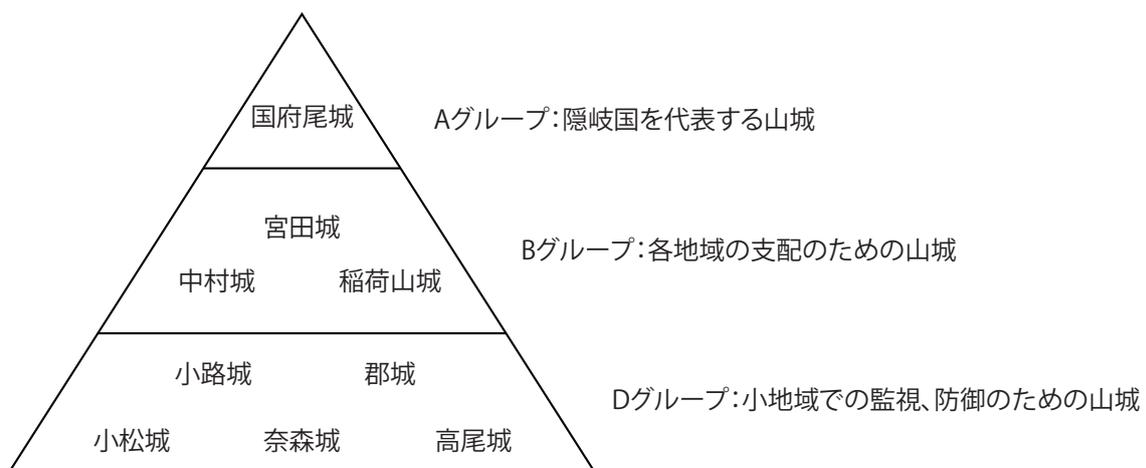
(3) 現地調査のまとめ

現在隠岐の島町には表2のように16箇所の城館が候補地としてあげられているが、このうち大久城跡、代城跡については、遺構の確認ができていない。しかしながら、その他の城館については、本事業において概況を把握できるようになった。

これまで地元にてのこる伝承や、『陰徳太平記』『隠州視聴合記』などをもとに語られることが多かったが、本事業では第3章2節で触れられる文献調査に詳述されるように、可能な限り中世期に作成された良質な史料をもとに、再検討を加えている。本事業における現地調査の役割は、一度、これまでの通説を排し、純粋に現地の残された遺構を読み解き、その上で文献資料での成果や、伝承と突き合わせる必要がある。

まず曲輪の削平状況や面積に着目する。これはその城館が長期に渡って使用されたり、十分な普請が行われたか否かを判断する視点となる。国府尾城跡は隠岐諸島の中で最も広い城域を持ち、曲輪の削平状況も良く、石垣も存在するため、隠岐一国を代表する城館と言えよう(Aグループ)。つづいて、宮田城跡、中村城跡、勝山城跡、稲荷山城跡は小規模ながらも曲輪が丁寧に普請され、各地域の中で中心となる城館である。この中で勝山城跡は標高の高い位置に存在するため、異なる目的で築かれた可能性が高い。これにより勝山城跡をCグループとし、それ以外の3城をBグループとする。それ以外の城館は城域が小規模であったり、曲輪の削平状況が悪く、異なる性格をもった城館としてDグループとする。

このグループ分けにより、Bグループに属する宮田城跡、中村城跡、稲荷山城跡は、それぞれの地域の中で、小規模な拠点となる城郭と判断される。Dグループに属するものの中では、高尾城跡、小松城跡、奈森城跡が特筆される。高尾城跡は城域が二つのピークに分かれて遺構が存在するが、その間の海に面した部分が大きく崩落している。しかし残された遺構は部分的ながら堀切が確認でき、曲輪も複数存在することから、本来はBグループに属する可能性を残す。小松城跡はほぼ主郭のみの単郭の山城と言えるが、城域西側には二重堀切と畝状空堀群が存在する。隠岐諸島内でも特筆されるべき遺構で、



勝山城 - Cグループ: 上記以外の目的で築かれた城

第20図 隠岐の島町内の山城の位置付け

軍事的色彩の濃い山城と言える。奈森城跡も単郭の山城で、西側にはハの字状に豎堀が存在し、その内部に小規模削平段が築かれている。おそらく城道として使用されたものと考えられる。また後背山地には高田山へ尾根が続くが、途中の愛宕山にも小規模な堀切と曲輪が確認できる。高田山は自然地形だが、そのままの状態でも利用できるような状態である。そのため、奈森城から愛宕山の遺構、高田山を一連のものと判断すると、都万の港を取り囲むように位置することがわかる。Dグループのうち、郡城と小路城跡は位置的に一連の城郭と考えられ、奈森城跡と共通する性格を持っている可能性があるが、郡城については今回詳細調査が行えていないため保留とする。

上記のことを総合して判断すると、Aグループの国府尾城跡は隠岐一国を代表する城郭、Bグループに属する3城は、宮田城跡(西郷)、中村城跡(中村を含む武良郷)、稲荷山城跡(五箇)における小規模地域拠点城郭といえる。Cグループの勝山城跡は異なる目的で築かれた城郭、Dグループのうち、小松城跡、奈森城跡も軍事的色彩や港との関係性が非常に強い城郭と判断される。

これらのことから隠岐の島町に存在する城館の中でも、いくつかのグループに分けることができ、遺構からその性格にも違いを見出すことができる。

ここで文献調査の成果を合わせて考えると、国府尾城跡は隠岐氏が隠岐一国に勢力を拡大する中で創出された城郭と考えることができ、天文期前後の時期に築城された可能性が考えられる。つまり国府尾城以前は、宮田城跡、中村城跡、稲荷山城跡などが各地域の拠点として存在し、奈森城跡、高尾城跡、郡城跡と代城跡などが、それらにつづく地域を代表する城館と言える。勝山城跡について標高が隠岐の島町の城館の中では非常に高い位置にあり異なる性質を持つ。小松城跡も軍事的緊張の中で創出された可能性を示している。つまり国府尾城築城以前と以後では大きく、隠岐諸島の城館を取り巻く環境が変化したことを示しているのである。ただ補足するならば、都万に存在する奈森城跡を一連とする城郭群、郡城跡・代城跡など、近世の編纂物で記される合戦との関わりで言うと、Bグループの城館を維持した勢力とは異なる性格を持っている可能性を指摘できる。つまり丁寧な普請をして居曲輪を造成し城を構える勢力と、そうでない勢力が考えられる。背景としては都万の奈森城跡など言えば水軍との関わりや、郡城などは稲荷山城との連携など今後の考察の課題は多い。文献史学の成果も合わせながら検討して行くべきであろう。

(4) 現地調査における今後の課題

1) 国府尾城跡

①航空レーザー測量による赤色立体図等の作成

国府尾城については、踏査によりおおよその全体像が把握できた。しかし、目で確認できない部分を補うため、赤色立体図等を活用し新たな遺構の有無を確認する必要がある。

②発掘調査による遺構の性格や内容の確認

調査により確認された曲輪や堀切、大竪堀、石垣などの主要な遺構については今後発掘調査を行い、国府尾城に用いられた築城技術や城の性格をより詳細に確認し、国府尾城跡の文化財としての内容を把握する必要がある。

③文献調査の成果との照合

今回の調査では並行して文献調査を行っている。文献調査の成果と照合し国府尾城の様相の把握を進めていく必要がある。

2) その他の町内の山城

①未確認の山城の調査

未だ未確認の山城については、文献や口伝、赤色立体図等をさらに精査し可能性の高い箇所を調査していく。

②各山城と歴史事実の照合・確認

文献調査の成果を活用し、歴史事実と併せて確認されている山城の性格把握をさらに進める。

第2節 文献調査

(1) 国府尾城に関するこれまでの調査研究

国府尾城は、永く隠岐の人々の関心を集めてきた。江戸時代に隠岐島内で作成された郷帳に基づく地誌や、中世以来の歴史をまとめた歴史書では、いずれも国府尾城や隠岐氏に言及している。そうした島内で記された史料のうち、寛文7(1667)年成立の『隠州視聴合記』に所収された『国代記』と、それに対する検証を行ったとされる『国代考証(国代紀考証)』が最も参照されている。二書について、『国代記』は編年体で記されているのに対し、『国代考証』は紀伝体で記され、守護やそれに類する人物ごとに裏付けとなる史料をあげている。

近代には、隠岐の歴史や島の名所旧跡を紹介する出版物が登場し、国府尾城をはじめとする山城や隠岐氏にも言及がある。隠岐の歴史が活字化されるようになった当初、明治から大正にかけて出版された『隠岐誌：一名・踏査見聞録』や『隠岐西郷町誌』などでは、隠岐の城に関して、鎌倉時代に東郷の宮田城が築城され、室町時代に西郷の国府尾城が築城されて居城が移ったとしているが、根拠となる資料はほとんど明示していない。大正から昭和初期にかけて『島根県史』や『隠岐島誌』の編纂のために、隠岐島内でも古文書が調査された。しかし、この時点で既に島後での中世の原文書はほとんど残存していなかったようで、代わりに『吾妻鏡』や『陰徳太平記』のほか、前述の近世に隠岐島内で編纂された史料に基づいて、隠岐の中世史が記されている。戦後の『西郷町誌』や『新修島根県史』の編纂に当たっても史料調査が行われ、それまでの研究に対する再検討もされたが、国府尾城については近世史料に基づいた記述となっている。こうした近世史料に対しては検証の必要性も指摘されているが、検証材料となりうる史料が少ないことから、長くこれらを基に国府尾城は研究されている。

また戦後には、戦前からの地域資料等をもとに郷土史家によって国府尾城をはじめ隠